田原本の遺跡 1

国史跡
唐古・鍵遺跡

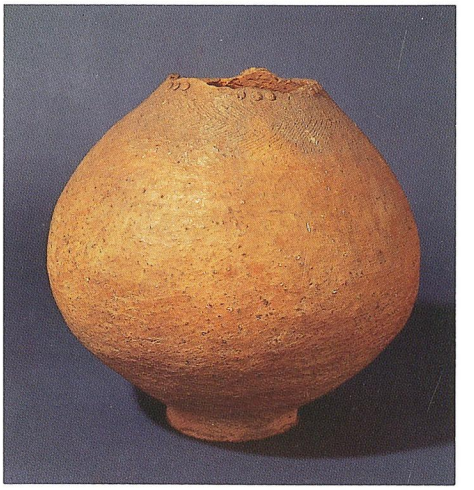
Vol. 1
―概説編―

田原本町教育委員会

弥生土器と遺跡の発見

1884年、東京都文京区弥生町で一つの壺が発見されました。この壺は、当時すでに知られていた縄文土器とは全く異なっていました。そこで、この壺とその後みつかった同類の土器は、最初の発見地の名前を取って「弥生式土器」と名付けられました。そしてこの壺が使われた時代を弥生時代と呼ぶようになりました。

「弥生時代」の言葉が定着してくると、その時代の内容が問題となってきました。森本六爾※は弥生土器の底に籾の痕跡があることや、縄文時代と違って低地に遺跡があることに注目し弥生時代が農耕社会であることを示しました。



最初の弥生土器／東京大学総合資料館

森本六爾

調査中の
末永雅雄博士（右）

唐古・鍵遺跡は、森本六爾ら多くの研究者が考古学界に紹介したり、地元の飯田氏親子が唐古池周辺で採集した遺物を図録として出版するなど、古くから知られた遺跡でした。しかし、皇紀2600年に備えて奈良盆地を縦断する国道が建設されることになり、そのための盛り土が唐古池から採集されました。

土取りの工事と並行して末永雅雄博士※らによる発掘調査が1936年から実施されました。

唐古池の調査

調査の結果、出土したさまざまな木製農工具や炭化米、植物製品は、弥生時代が農耕社会であったことを決定づけました。また、出土した膨大な土器は、弥生時代の時期区分の基準をつくり、弥生研究を進展させました。

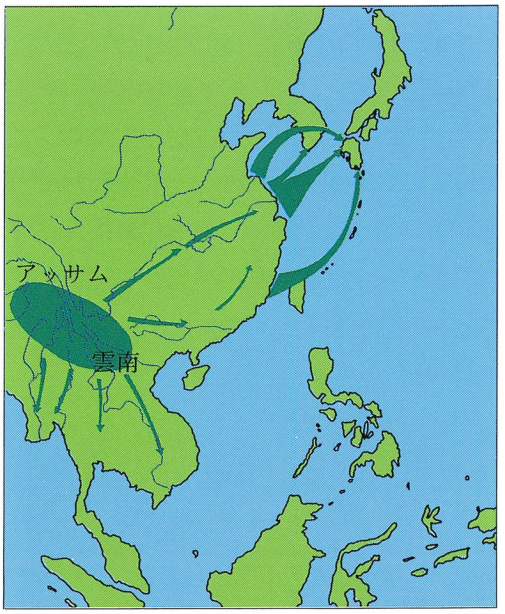
その後の調査により、弥生時代を代表する遺跡であることが判明し、1999年1月27日には国の史跡に指定されました。

森本六爾（1903～1936）奈良県桜井市出身。東京考古学会を主催。弥生～古墳時代等の論考に優れたものを多く残す。「日本青銅器時代地名表」「日本原始農業」などの著作あり。松本清張の短編「断碑」の主人公でもある。
末永雅雄（1897～1991）大阪狭山市出身。橿原考古学研究所初代所長。石舞台・高松塚等数多くの調査を手がけた。

弥生文化とは

弥生時代というのは、一般に紀元前３～４世紀から紀元後３世紀のおわりまでの約６００年間をいいます。日本人が本格的に米を作り始めてから、大王（おおきみ）が出現して大きな前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）を作るようになるまでの間が弥生時代にあたります。

稲作が日本列島にどのような経路でやってきたかには、いくつかの説※があります。中でも有力なのは、雲南・アッサム地方一帯で発生し、それが今からおよそ六千年前に中国華南（かなん）（長江流域（ちょうこう））に広がり、華南から朝鮮半島を経由したという説です。



稲作の伝わったルート

朝鮮半島から伝えられ、全国に広がったのは米だけではありません。水路などの溝を掘る技術や各種農具は、完成された形で米とともに全国に伝えられました。石斧や石庖丁等は朝鮮半島のものとほとんど変わりません。最近では、豚の存在から家畜を飼う習慣も伝えられたと考えられています。このほか金属（青銅や鉄）の知識や農耕にともなう祭りの道具、占いに骨を使う方法（卜骨（ぼっこつ））も大陸から伝えられました。

米づくりの道具と石の斧

豚の下顎と占いに使った肩甲骨

米の伝播に関する諸説　このほかにも、長江流域から南海上を島伝いにわたるルート、華北を経由する陸上ルートなどが考えられている。

弥生時代の環境と自然

弥生時代の気候は、前の縄文時代にくらべ、寒くなっていたと考えられています。縄文時代のはじめに一度地球が暖かくなり、海の水位があがったことは有名ですが（縄文海進）、それが次第に寒冷化し、海の水位も下がっていきました。特に縄文時代晩期～弥生時代初頭にかけて急激に海位が下がり（弥生小海退）、気温も現代よりも低くなったのです。この現象により、現在と比較しても約２～３ｍ水位が下がったといわれています。弥生時代中期はやや温暖化しますが、後期にはまた、冷涼化したといわれています。このような気候の変化は弥生の人々の居住地や生活様式に大きな変化を与えたようです。

村屋神社の樹叢（県指定天然記念物）
田原本町蔵堂所在。盆地中央でのイチイガシを主木とした照葉樹林は希少。

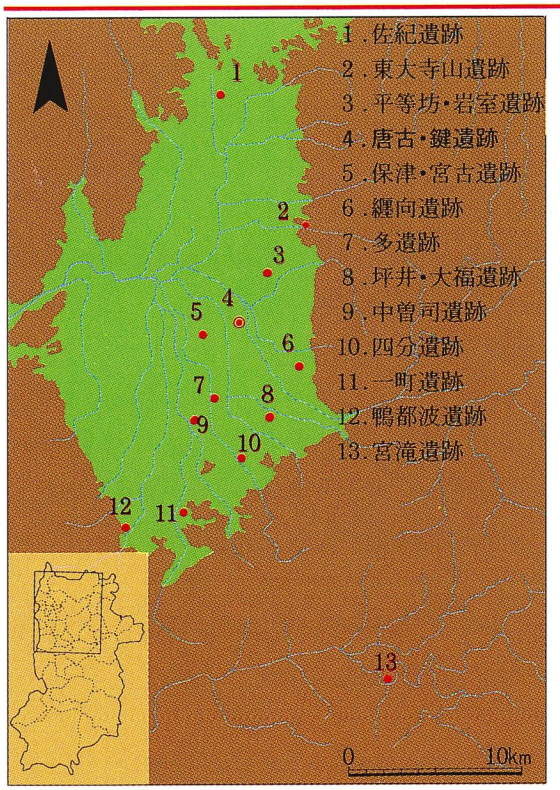
奈良盆地の周辺の山々にはカシなどの照葉樹林※がしげっていたと考えられます。また、盆地内部も起伏に富んだ地形でした。大小の河川が今の王寺付近に向かって合流する形で網目状に流れていたのでしょう。

唐古・鍵遺跡の周辺には、細かく分岐した中小河川（流路幅３０ｍ前後）とその周囲に広がる湿地が存在しました。小河川は流路を時期ごとに変化させながらも、集落の東側と南西側を蛇行しながら北西方向に流れていったようです。

照葉樹林　温暖で多雨な地方にみられる。カシ、クスノキ、ツバキ、サザンカなどを主とする。

保津・宮古遺跡の川跡（第３次調査）
弥生時代～中世の複合遺跡。集落の西端で幅約１５ｍの弥生中期の川が調査された。

奈良盆地の弥生集落



奈良盆地の主な弥生集落

西方から伝わった稲作文化は、奈良盆地の各地にも多くの弥生ムラを誕生させることになりました。奈良盆地に初めて弥生のムラをつくったのは唐古・鍵遺跡と考えられています。弥生時代をとおして営まれ、その地域の中心となる集落を拠点集落といいます。唐古・鍵遺跡はその代表例であり、また、奈良あるいは近畿の拠点となる集落とも考えられる遺跡です。近畿地方の拠点集落は、低地に大規模に営まれています。

このような低地集落とは別に、山地に位置し、石庖丁※がなく、石鍬※と呼ばれる道具で畑作を営んでいた集落もあります。

また、戦争に備えた小規模な集落が丘陵上などに営まれることがあります。それらは高地性集落と呼ばれ、のろし台※のような施設をもったものも確認されています。

拠点集落の周囲には分村的なムラがいくつか形成されます。唐古・鍵ムラの場合、法貴寺遺跡、舞之庄遺跡、清水風遺跡※、羽子田遺跡等が分村とみられます。法貴寺遺跡・清水風遺跡では方形周溝墓※などが検出されており、唐古・鍵遺跡の墓地である可能性もあります。また、清水風遺跡では唐古・鍵遺跡に次いで大量の絵画土器※が出土しています。これらの遺跡は、短い期間営まれた小規模なムラです。耕地の拡大や拠点集落の過密化などにより分村が作られたとも言われています。

平等坊・岩室遺跡の環濠
天理市平等坊所在。多重環濠をもつ拠点集落。東西３５０m、南北２５０m以上。

石包丁　稲の穂を摘み取る道具で、半月形の扁平な石器。奈良盆地では、紀ノ川流域の石を主に使っている。
石鍬　土を掘る時や耕す時に使われた道具。石を割ってつくられる。
のろし台　煙をたちのぼらせ、情報を遠くに伝えるための施設。ふつう小高い見晴らしのよいところに造られる。
清水風遺跡　天理市庵治町所在。唐古・鍵遺跡の北約６００mに位置する。３０点余りの絵画土器が出土した。
方形周溝墓　四方を溝で囲んだ墓。一辺１０～２０m程度で、低い盛り土の中に遺体が埋葬される。
絵画土器　土器の表面に鹿、人物、建物、船などがヘラで描かれたもの。弥生中期に盛んで、全国で３００例近い。

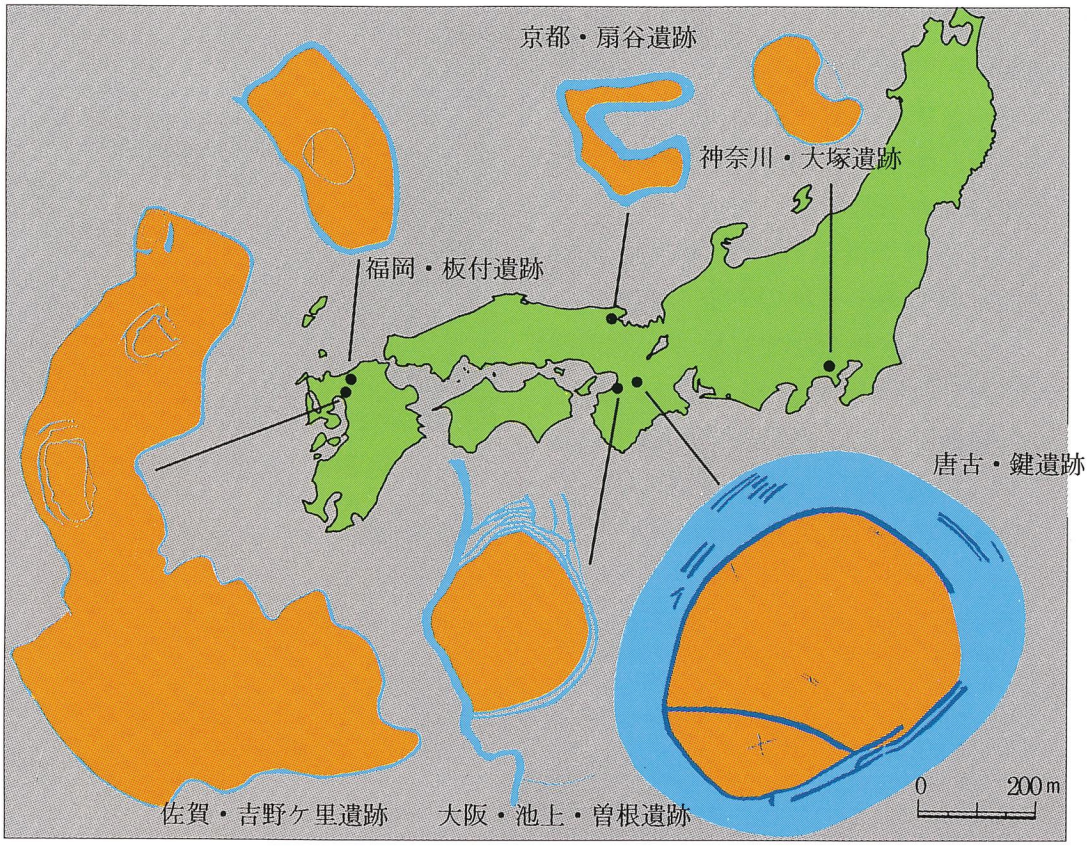
環濠集落の成立

弥生時代の集落は、多くの場合、ムラの周囲に溝を巡らせています。これは、ムラの防御を意図したものとも、灌漑用や運河のような用途だったともいわれていますが、このような集落形態は、朝鮮半島から稲作とともに伝えられた土木技術があってはじめて成り立っています。

唐古・鍵遺跡も集落の周囲に溝を何重にも巡らせています。一番大きい中期の大環濠では幅８ｍ以上あり、さらにその外を幅５ｍ前後の環濠が４～５条巡っています。このように溝でムラ全体を囲い込む集落を「環濠集落」といいます。

ただし、時期と地方により環濠集落の構造は大きく異なります。唐古・鍵遺跡や池上・曽根遺跡※などのように沖積地に集落が営まれているものは、河川をうまく取り込むことにより、防御だけでなく運河としての利用や治水などの目的も同時に果たしています。また、高地性集落にも環濠をもつものがありますが、これは極めて防御的な集落で、いわば山城や砦のような機能をはたしたと考えられます。九州の丘陵部でみられる環濠集落は、集落全体を囲む外濠のなかに大型建物を囲む内濠があり、争乱に備えた防御機能のほかに、すでに身分の差があったことを表しているようです。

池上・曽根遺跡　大阪府和泉市・泉大津市に所在する。１９７６年、国指定史跡となる。川と多重環濠によって囲まれる大阪最大の弥生集落。出土した鳥形木製品は弥生時代の祭祀を語る上で重要。



各地の環濠集落の規模

空からみた唐古・鍵遺跡（上が北）

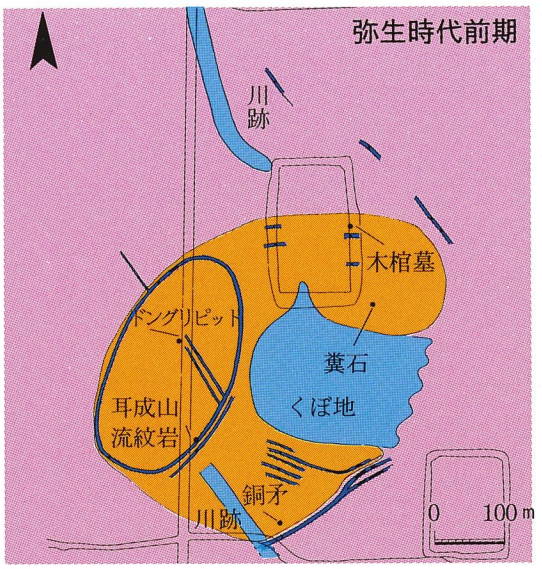
ムラの南東側を囲む環濠群
（第40・47次調査）

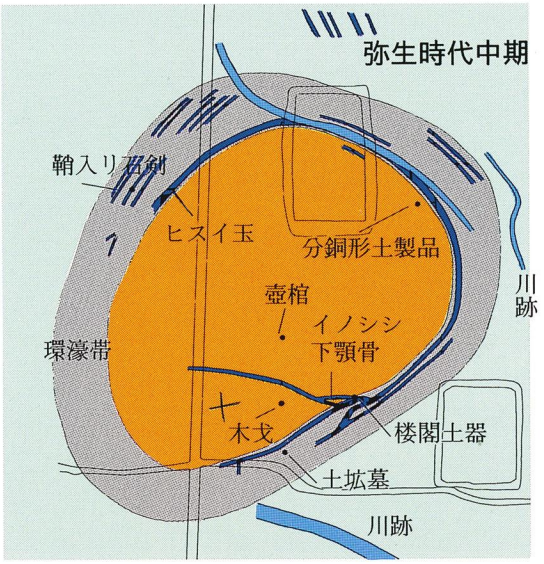
ムラの南東側を囲む環濠（第47次調査）
濠の幅約８ｍ

ムラの変遷

唐古・鍵遺跡は弥生時代前期に始まり、古墳時代前期まで６００年間以上継続します。この長い年月の間にはムラも変化していきます。

唐古・鍵遺跡は弥生時代前期の段階では三つの集団に分かれて集落を形成していました。そして、前期の後半にそれぞれが環濠をもつようになります。近年の調査で遺跡の東側から中央にかけてくぼ地があったことがわかっており、前期集落はこのくぼ地をとりまく小高い所につくられたのです。



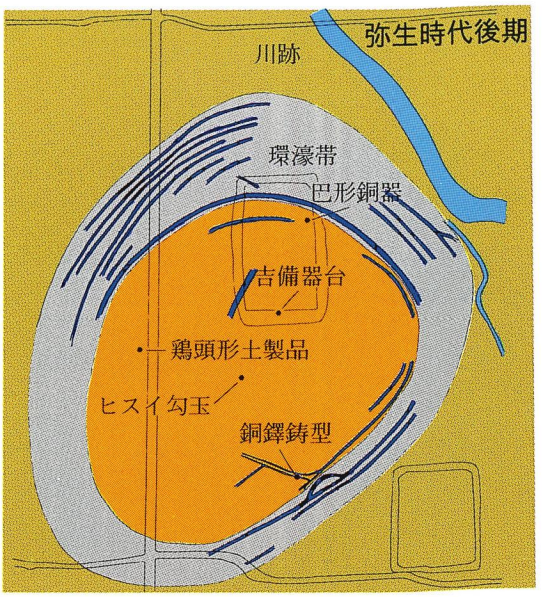


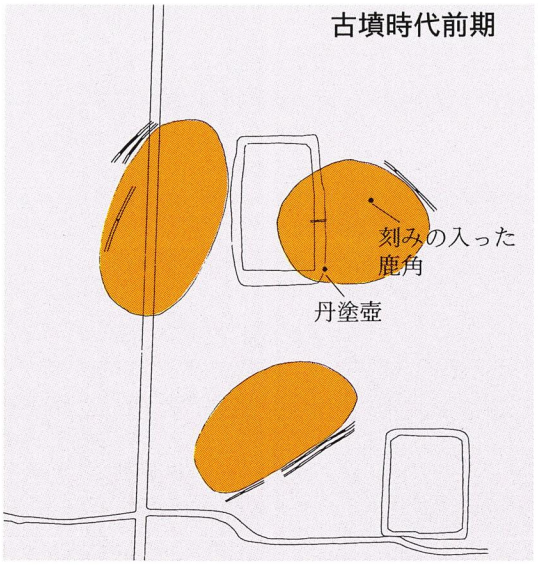
中期になると、遺跡中央のくぼ地が次第に埋め立てられる一方で三つに分かれていたムラを統合するように囲む大環濠が掘られます。大環濠の外側には、幅５ｍ前後の環濠が４～５重に巡っています。大環濠の内側は、直径約４００ｍ前後の広さです。内部では、住居や井戸が見つかっています。また、集落の中心には楼閣※が建てられていたでしょう。この時期に、唐古・鍵遺跡が弥生時代最大級の集落に成長したのです。

年代		BC300	BC200	0
年代		縄文時代	弥生時	
区分		晩期	前期	中期
唐古・鍵ムラ	出来事	●原野・雑木林が広がる	●微高地に人が住みはじめる ●３カ所に小ムラが成立 ●木器貯蔵穴が掘られる	●大環濠が成立し、３カ所のムラが一つになり、その後濠は３～５条となる ●井戸が盛んに掘られる ●大洪水で環濠が埋まる
	出土品	○突帯文土器	○尾張の土器（条痕文土器） ○彩文土器 ○投弾	○銅鐸の鋳型 ○卜骨 ○絵画土器（楼閣・鹿・人物）
日本		北九州で稲作が普及		倭国は百余国に分かれていた
中国		春秋・戦国時代	秦が中国統一　劉邦・漢の建国	武帝・楽浪郡設置

後期には、中期後半の洪水でいったん埋没した環濠を掘り直し、ムラを再建しています。

古墳時代の初めにも環濠を掘り直していますが、おそらくこのときの掘り直しが最後の環濠となったようです。集落の規模は次第に縮小し、再び弥生前期同様に三か所で小規模なムラが営まれます。ムラが消滅するのは、古墳時代中期ごろでしょう。





唐古・鍵遺跡では、ムラがなくなった後、唐古池周辺に古墳が築かれたようで、形象埴輪※などが出土します。その後、平安時代から戦国時代には豪族の居館が遺跡の西側と東側に築かれました。調査の結果、中世の環濠や井戸などが検出されています。江戸時代には農地となり、唐古池や鍵池が遺跡の上につくられました。そして、この池の波打ち際に露出した遺物が遺跡発見のきっかけとなったのです。

楼閣　中国の城などに築かれた高層建物で、一般に物見櫓などの用途が考えられる。楼観。ただし、日本の大型建物に関しては、身分の高い人の住む高殿、宗教的な建物（神殿）などの用途も考えられる。
形象埴輪　人物、馬、家などの形をした埴輪で、古墳の周囲に並べられた。

	AD300	AD400	AD600	AD1500
代	古　墳　時　代			古代～中世
後　期	前　期	中・後期		
●再び環濠が掘られる ●井戸のまつりがさかん ●環濠が埋まり、ムラは小さくなる	●ムラが３カ所ほどに分立する	●古墳がつくられる		●中世居館が築かれる
○鶏形土製品 ○鉄斧 ○記号文	○刻みのある鹿角 ○丹塗壺	○埴輪 ○子持勾玉		○曲げ物 ○瓦器椀
倭国大いに乱れる　邪馬台国　箸墓古墳		倭の五王		
王莽・新の建国　光武帝・漢の再興	三国時代　司馬炎・晋建国	南北朝	隋　唐	宋　明

弥生都市　－唐古・鍵遺跡

唐古・鍵遺跡から出土する様々な遺物は、この遺跡のいろいろな側面を見せてくれます。一つは農村（ムラ）的な、他方は都市的な一面です。

出土する大量の石庖丁や木製農耕具、籾殻、炭化米、稲の穂束は、唐古・鍵遺跡の人々が稲作農耕をおこなっていたことを示しています。また、稲だけでなく、稗・粟・ウリ・ヒョウタンなどの種も出土しており、このような雑穀の栽培もおこなっていたのでしょう。

さらに、遺跡からは大量のイノシシあるいは豚※の骨が出土していることから、狩猟や牧畜をおこない、主食の米を補っていたこともわかっています。

これらのことから、唐古・鍵遺跡は稲作を行う農村としての性格を強く持っていたことがうかがわれます。

2200年前の大型建物

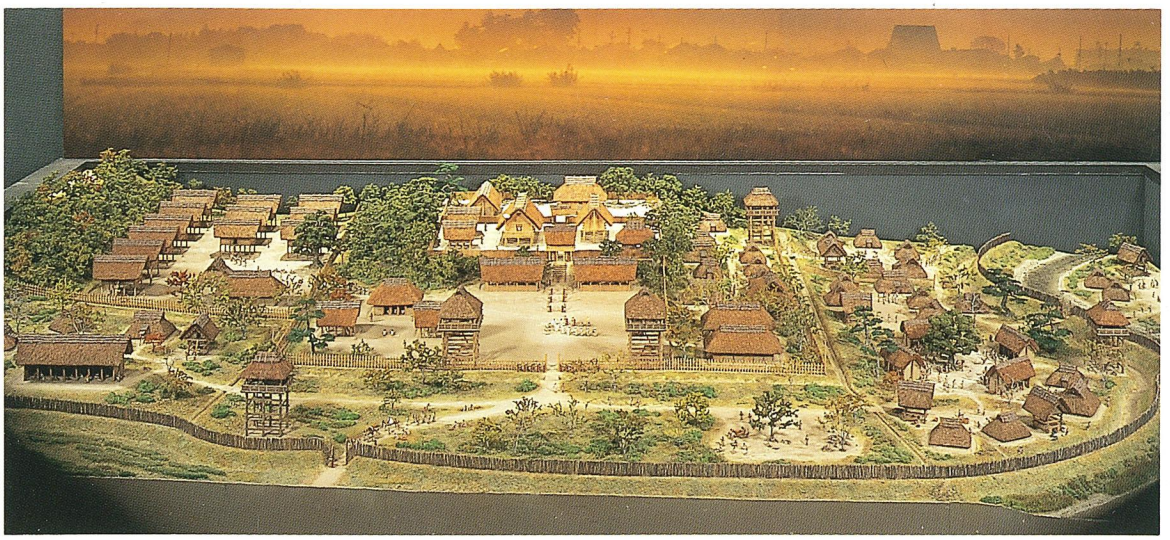
東西７ｍ、南北11.4ｍ以上で畳約50畳の規模を有する。束柱を使って床下と床上を分離した本格的な高床建物である。柱穴は16基見つかり、その内の３基には直径60㎝のケヤキ柱が残っていた。また、棟を支える柱にはヤマグワの材が使われていた。唐古・鍵ムラの大環濠が成立する以前で、西地区の中心施設と考えられる。

唐古・鍵第74次調査建物

その反面、唐古・鍵遺跡が単なる農村ではなかったことも事実です。唐古・鍵遺跡の特徴の一つは、様々な地域の土器が運ばれていることです。※土器には、海の幸や山の幸などそれぞれの地域の特産品が入れられていたのでしょう。他地域の人々が盛んに唐古・鍵遺跡をおとずれ、「市」が開かれていたのではないでしょうか。

不明な点はありますが、唐古・鍵遺跡と他地域との交流は、相互の交流というよりはむしろ一方的な流入という形で行われたのかもしれません。

また、唐古・鍵遺跡では青銅器の生産が行われていたことが知られています。当時の青銅器生産は、きわめて限られた大集落でしか行われていなかったようです。青銅器の生産には専門知識が必要となり、そのため、ある程度その仕事に専門的にあたる工人がいたことが推定されています。青銅器だけでなく、石器や木器の一部も専門的に製作する集団がいたと考えられます。これらは生産の分業化※として位置づけることができます。



卑弥呼の館復元模型／大坂府立弥生文化博物館

唐古・鍵遺跡では、弥生時代最大級のヒスイ※製勾玉（まがたま）が出土しています。これは新潟県糸魚川（いとい がわ）市周辺で採集される石が原料となっており、当時としても非常に貴重なものでした。このような品が運ばれるということから、唐古・鍵遺跡では相当な富が集積されていたことを知ることができます。

このように、唐古・鍵遺跡は単なる農村ではありませんでした。この遺跡が、巨大な環濠に囲まれていたため、災害や争乱による被害を未然に防ぐことに成功し、安定した発展を遂げることができたのでしょう。その結果、次第に富を蓄積し、近畿一円の流通ネットワークの中枢の一つに成長したと考えられます。また、こうして築かれた富を背景とし、青銅器などにみられる専業（せんぎょう）集団を育てることができたのでしょう。

青銅器生産にかかわる専業集団や、楼閣（ろうかく）のような高層建築物の存在、また各地との交流によって物品が集約されていることを考えると、極めて都市※に近い構造をもっていたことがうかがえます。このようなことから、唐古・鍵遺跡は弥生都市ともいうべき性格の集落だったとみることもできるでしょう。大阪大学の都出比呂志（つでひろし）さんは、弥生時代の近畿の首都ではないかと言っておられます。

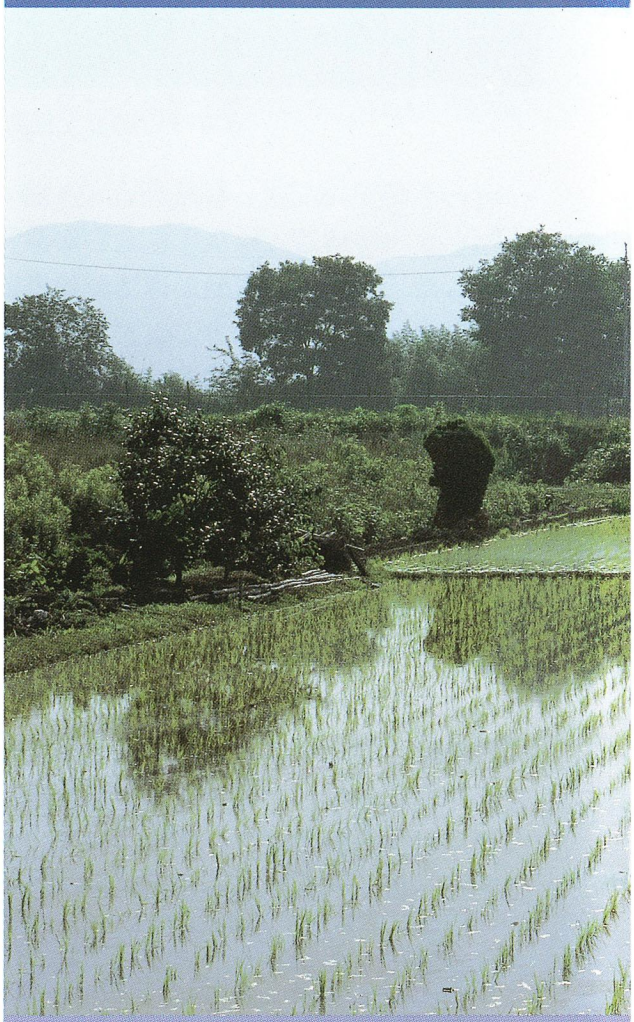
イノシシ・豚　弥生時代の豚は、形態的にはイノシシとそれほど大きな差はない。しかし、歯槽膿漏がみられるなど、明らかに家畜として飼われた痕跡があり、イノシシではなく豚と呼ぶのが適当と考えられるようになった。

唐古・鍵遺跡の搬入土器　唐古・鍵遺跡では前期から中期初頭までは伊勢湾の土器が、中期以降は瀬戸内海沿岸の土器が特に多い。また、生駒山西麓、近江など近隣地域の土器も一定量運び続けられる。

分業　原始時代の生産形態は、一般に自給自足が基本となっていたと考えられる。しかし、一部では特定の製品を集中的につくるグループも存在したようで、大集落になるほどその傾向が顕著となる。

ヒスイ　弥生時代のヒスイの大半は新潟県糸魚川市周辺で採集されるものである。なお、唐古・鍵遺跡出土の勾玉は全長５．３ｃｍで、弥生時代のものとしては極めて大きい。

都市　都市の定義は様々あるが、弥生時代の大規模な環濠集落を都市的なものとしてとらえる研究者もいる。都市の性格のなかで特に重要なのは、専業的に産業、政治（祭祀）に従事する人がいることである。また、ある程度の規模があり、防御施設、神殿、王宮、公共施設、市場や工房などの施設があることが重要となる。



写真提供
大阪府立弥生文化博物館
天理市教育委員会
東京大学総合資料館
風間　秀夫　　森本　君子
協　　力
桜井市教育委員会
青木　勘時　　赤澤　威
小山田　宏一　清水　真一

田原本の遺跡 1

唐古・鍵遺跡　Vol.1
概説編

1999年11月 1 日　3 次改訂
編集・発行　田原本町教育委員会
〒636－0392
奈良県磯城郡田原本町890－1
ＴＥＬ　07443－2－2901